

文ヅ、上納被仰付候、夫々諸色少々宛直段引下ダ候而、町方米小賣相場、錢百文に付、上白米六合、中白米六合五勺、下白米七合、是ニ准じ諸色直段引下ダ、騒動之後御藏前御張紙も、三斗五升入百俵ニ付、百三拾兩と改り申、此砌町奉行曲淵甲斐守殿○山村信濃守殿○眞勤役ニ而有之候、去ル天明三癸卯年より打續五ヶ年之凶作、江戸町々ニ而は、伊奈半左衛門殿台被成御渡候穀麥を水につけ、日本橋大通りは勿論、大傳馬町本石町の通り迄も、往還に臼を直し、右之穀麥を掲申、誠ニ江戸町々在邊のごとくニ而有之候、此としの春頃よりして、所々方々ニ而有之候、妻子を置去ニいたし、覗落等いたし候もの、其數いくらといふ事をしらず、近在近國奥州邊ニ而ハ、食事ニ盡て渴死いたせしもの夥しく有之、誠ニめもあてられぬ次第、哀といふもおろか也、尤此とし三月十二日、町奉行所も、江戸中町々端々場所にいたる迄、一統に朝夕とも粥をたべ候やうにとの御觸有之、春中より江戸町々場末迄、大根、薩摩いも、割麥、小豆、大角豆等をませ候而、一圓にかけて飯あるひは粥をたべ候、此砌とふなすかぼちやをゆで、砂糖きなこをつけて賣候、いつこく餅とて、大きなるいまさか、よねまんぢうを拵候て、一ツ八文ヅ、に賣、殊之外時花候はやりへ、町中端々方々ニ而こしらへ賣申候、此砌は、着計至而下直ニ而、殊に餓夥しくとれ、かすご小鯛杯すさまじくとれ、下直ニ而有之候、江戸町中殊ニ江戸橋日本橋之上などにて、なまりぶしニ鹽をそへて、壹本四文よりうり申候、前代未聞珍ら敷事ニ而有之候、後の世の人々に玄らしめんがため、荒増記置候。

〔救荒便覽後集下〕凶饑悲慘の狀を記しておごりを戒む、天保巳年○四に、塾生忠純語りしは、奥州へ細工に行し松五郎と云者いへるは、奥州邊にて九萬三千人を逐ひ拂ひしを見たり、又石の巻とか云所にて、盲目三人川端にて終日酒を飲、其夕皆水に投じて死けり、又婦人子を川に投、ふりかへりふりかへりて悲歎せしが、立戻り水に投じて死けり、又松の木へ子を結び付殺せるも、